

# 住宅建築賞

## 入賞作品

審査委員長 山下和正 委員 石井和紘, 五十嵐敬喜, 黒川哲郎, 坂本一成,  
副委員長 伊東豊雄 鈴木 恂, 長谷川逸子, 山本理顕

今回の「住宅建築賞」は結果的に4点が入賞し、そのすべてが戸建小住宅であった。応募点数は22点で、その中には規模の大きい集合住宅もいくつかあり、また入賞候補として最後まで意欲作の集合住宅が残ったが、惜しくも入賞を逸してしまった。

集合住宅は面白い建築テーマであるし、最近の作品例には優れたものが多い。しかし、今回の応募作品は一応のレベルに達しているものが多い反面、更にそれから一歩前へ出て、建築作品としての魅力という点では、物足りないものばかりであったのも事実である。せっかくマンション公害や、市民の目で建築を見直す運動などに深くかかわっている五十嵐弁護士に審査に加わって頂いたにもかかわらず、集合住宅の力作が現れなかったのは残念であった。

東京建築士会の理事会で、個建住宅と集合住宅・住宅団地などを、同一のカテゴリーとして審査するのはいかなるものかということが提議された経緯があり、このことが今回、審査委員会の席上で議題とされたが、ここでは特にその必要はないということ

となった。しかし、今回のようにデザインのレベルが戸建と集合で大きく別れてしまうと、やはり部門別も必要かもしれないと考えてしまう。

しかし、この賞は基本的には自薦制が前提である関係から、どうしても法人で設計をしていることの多い集合住宅の応募が少なくなってしまう。審査員をも含む他薦制を取り入れることを検討すべきかもしれない。

今回の審査は、予め書類審査をパスした5点の作品を、ほぼ全員の審査員が参加してバスをチャーターして実地審査を行った。このバス旅行で私が強い印象を受けたのは、首都圏の居住環境の質しさであった。今さらいいだすもおかしなことかもしれないが、街の構成、道路の構成、家のデザイン、どれをとっても世界一流の繁栄した工業国とは思えない水準であるが、さらにその住宅の価格を考えた時、改めて大きな矛盾を感じるのは果たして私だけだろうか。

(山下和正)



審査風景

### 住宅建築賞

風の舞う家

海野 健三



柳海建築家工房  
建築主 高山 有男  
施工者 柳海建築家工房  
竣工 平成元年8月  
構造 木造

海野さんは施工まで引き受ける。実際に自分の手で作る。だから、材料の選び方から、ディテールの作り方、様々な創意工夫が全て、現場での施工場面に現れるようにできている。つまり、施工者の手の痕跡のようなものが作品になるのである。だから意表をつかれる。一般的な建築家の発想とは順序が全く逆転しているからである。

今回はその上に、以前やはりこの住宅賞の審査で拝見した住宅よりも遙かに美しく仕上がっているのにもっと驚いた。でもあんまりうまくつくりすぎると、海野さんの手の痕跡が希薄になって、せつかくの逆転劇がまた逆転してもとに戻っちゃうんじゃないか。老妻心ですが。

(山本 理顕)

### 住宅建築賞

TOP-HOUSE

杉浦 伝宗



柳アーツ&クラフツ建築研究所  
建築主 北島 奇  
施工者 柳モイス  
竣工 平成元年5月  
構造 鉄骨造

この住宅は、小高い丘の強い傾斜地に、藪棚状に造成することなく、地形に沿って鉄骨構造で段状に支えられ、自然に無理なく建てられている。こうしたことがこの住宅の構成、さらにその性格を決めている。

前面道路に対して敷地が傾斜して下がっていることから2階に玄関がとられ、そこから外部であるテラス、バルコニーを廻り込み、ギャラリー、食堂を経て中2階の居間に続く、このスキップ的空間構成がこの住宅の要と思われる。敷地の特殊性からのこの特殊な動線がその廻りの諸部と関係をとつつ、自然で穏やかな、しかも広がりのある見事な空間となっている。

近代建築の類型化した手法に対する批評性、また特に居間の広さや眺望に対する扱い等に、より丁寧な配慮が求められたが、大方、特異な敷地での建物全体に対する素直な設計態度に好感が持たれた。

(坂本 一成)

### 住宅建築賞

喜多見の家

堀 啓二



柳山本・堀アーキテクト  
建築主 堀 啓二・堀 若菜  
施工者 柳森田建設  
竣工 平成元年5月  
構造 木造(基礎は一部RC造)

建築家の自邸であるため、家族生活が具体的に表現されていて、全体に居心地の良さを感じさせてくれる木造住宅であった。

幼いお嬢様が遊んでいらした前庭。直接2階の玄関や居間に上らせる階段。その2階の玄関廻りの檜の生地を生かしたフレームの開口部。ベンチの置かれた2階のテラス。朱色フレームや和紙をはって中心にある階段。このような各ヶ所に、細やかなディテールと適したスケールをつくっているだけでなく、さらにこの小さな敷地の中で全体に自然環境を確保することが考えられていて、住宅設計の基本を確実にとらえている姿勢が評価された。

(長谷川 逸子)

### 住宅建築賞

鈴木邸

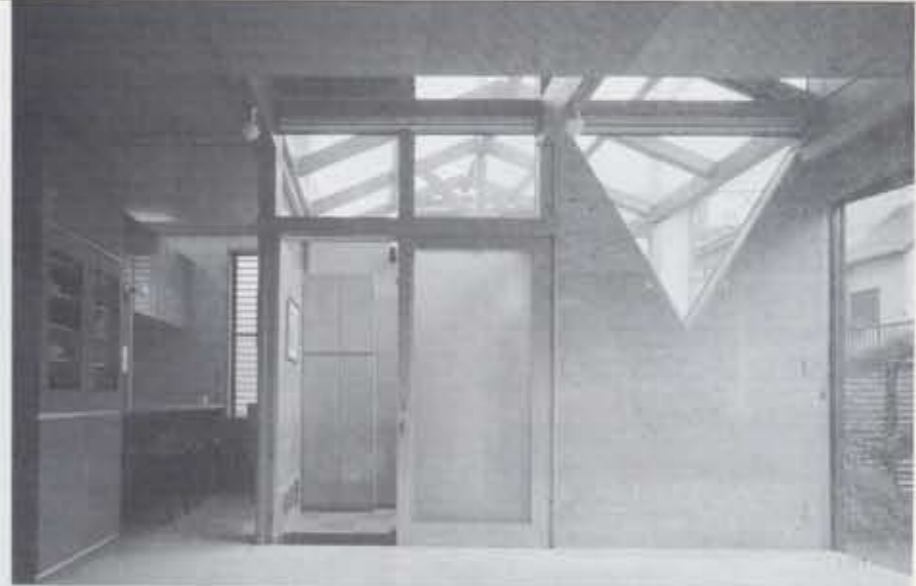
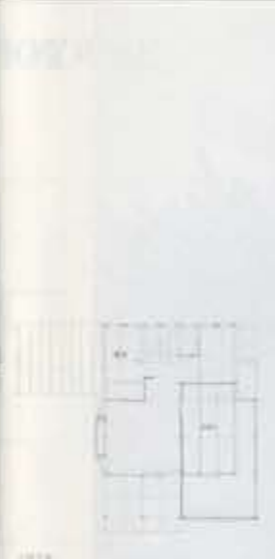
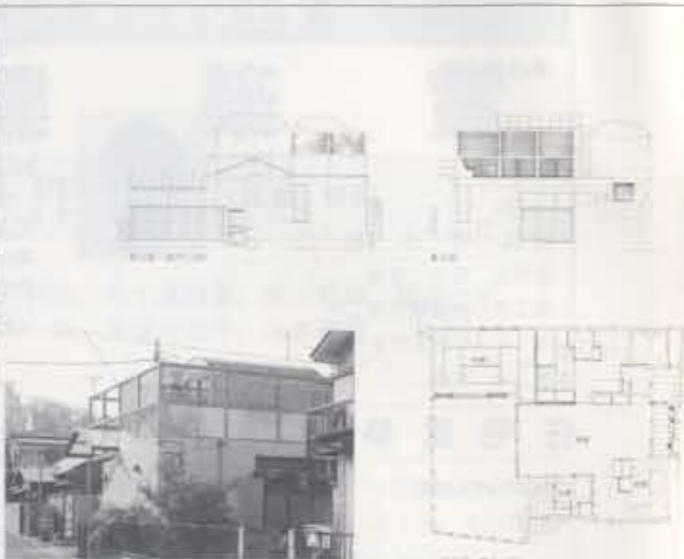
諸角 敬+松本 剛



諸角敬建築・デザイン研究室 STUDIO A  
建築主 鈴木 武久  
施工者 尾身工務店  
竣工 平成元年7月  
構造 鉄筋コンクリート造+鉄骨造

江東区大島のみわめて地盤の悪い狭小敷地(23.5坪)に建つRC造(一部鉄骨造)3階建ての住宅である。3世代5人の家族がこの住宅に住んでいる。恐らく設計者はこの狭小敷地と複雑な居住条件との間でかなりの苦心を強いられたいに違いない。しかしこの住宅の良さはこれらの複雑な設計条件にもかかわらず、明快かつ大らかに問題を解決した点にある。まず第一に開口4.1m、奥行3.6m×3スパンの基本グリッドに倣ってコンクリートのフレームを構成し、階段、収納等をグリッドの外縁に出して平面を単純化したことである。さらに2階にエントランスと居間、食堂を置き、その上下に居室を配ることによって平面を単純化したことである。これらはいずれもオーソドックスな解決であるが、基本に忠実であることによってこの住宅を安心感のある快適なものとしている。若い建築家による都市住宅は最近とみにファッション化し、技巧的な形態に走りがちであるが、この住宅ではむしろ不器用と思える程に形態に走ることを避けている。やや技巧に陥っているのは3階のテントの架けられたデッキである。このスペースはあまり成功しているとは思えないが、ここでも日照や雨に対する細かい配慮をうかがうことができる。ざりざりの条件で住むことの難味を覚え、空間に置き換えていく方法をさらに賢実に発掘して下さい。

(伊東 豊雄)



動く扉の家

この扉が南開します。(3mmロジックを利用)

